

松村祝男著 地域の近代化と果樹作の展開

—静岡県下のみかん作を中心として—

静岡県下のみかん産業は昭和四七年以来毎年生産過剰の状況にあり、価格は生産費を下回る傾向を示し、経営の不安と危機感から他作物への転換・伐採・放任へと各農家の栽培意欲の減退が目立つようになり、みかん農家の若者の中にも、他産業に転職、離農する者もあって、後継者不足が心配されているが、真剣に将来のみかん産業にかけている若者も多く、みかん産業の安定へ積極的な対策—優良みかん団地の育成と共選場の再編成など—に取り組んでいる。ところが最近円高に伴う黒字減らし対策の中で、オレンジ・果汁の対米輸入枠の拡大などの政策が持ちあがり、県内のみかん産地は大きな衝撃を受けている。このように静岡県下のみかん産業は今まさに曲がり角に立っていることは確かである。そういった時点において本書が出版され、県下みかん産業の原点に立ち帰り、その展開を跡づけてみることは、まことに時機を得たものと言えよう。

そういった意味合いから著者がこの問題に取り組んだ時期に触れてみると、本書の「おわり」の言葉に、「みかん栽培の研究に入ったのは、ちょうど果樹ブームの時期であった。目を見張る圃地拡大のありさまをうけて、多くの研究論文が発表され活況を呈していた果樹研究も果樹ブームの低下とともに減少した。みかん栽培の地域的展開を、農村の資本主義化としてとらえ体制のもつ特質との関連

性において考察することの必要性を鮮烈に感じた」と述懐されていることからみて書名の「地域の近代化と果樹作の展開」の構想が窺われる。

そこで本書の内容構成を瞥見すると、まず「問題の所在と解明の基本的姿勢」という序章に始まり、第一章から第三章までは、静岡県下の藤枝市西方・引佐郡下（主に三ヶ日町）・静岡市用宗地区の三つのみかん産地を選び出してみかん作の地域的展開を記述し、第四章と第五章の両章に亘ってみかん作の地域的展開の原動力となった報徳運動について庵原地区と稲取地区との二例を示しつつ検討し、第六章では全国的視野に立って農業基本法（昭和三六年公布）農政の展開とみかん作の動向について論究している。そして終章は要約と補遺である。なお叙述を補なうために、空中写真の口絵四、図二八、表五六が添付してある。

本書は、ここ数年の間に「人文地理」・「千葉商大論叢」・「日本大学地理学科五十周年記念論文集」・「地理」というようないろいろな紙上に書かれたエッセーを集めたものであるにもかかわらず、鮮明な色彩、一貫した主張に貫かれているのは、その間、著者が意識的にそれにとめたためであろう。

その主張というのは、序章の「問題の所在と解明の基本的姿勢」の中で示されているように、地域住民の生活を中核に置いて社会的生活空間全体を包含する資本主義化を主軸とする体制の近代化に対応した果樹農業（ここでは主にみかん作）の発展過程を捉えようとするのであって、単に資本主義の発展に対応して果樹農業の展開を考察してきた従来の諸業績と異なる点である。こういった観点に立

って第一章以降において静岡県下のみかん産地を例として、みかん作の地域的展開要因の形成が地域の近代化の中でどのような形で形成せしめられるかというところに重点を置いて考察を進めているのである。

しかしながら、俗に「言うは易く、行なうは難し」という言葉があるように、序章中の地域論では華かな論義が繰りひろげられ、従来の地理学徒が好んで使用する手法の一つを否定して、地域的展開の表現は、「単に土地空間的にみかん栽培地を新旧の地図などを比較し、その消長を述べることもこれに当たらない」（八頁）と論断している。そう論じながら、具体的に稲取地区みかん作の空間的拡大の一節では土地利用図上に現われた実態の項目を設け、五万分の一地形図「稲取」の（1）明治一九年測図、同二九年第一回修正、（2）明治一九年測図、昭和二年第二回修正及び同一九部分修正、（3）明治一九年測図、昭和二年第二回修正測図、同二七年応急修正、（4）明治一九年測量、昭和四六年編集によって作成された明治初・中期、昭和初期、昭和二〇年代、昭和四六年頃の四枚の土地利用概要図（一一九―一二〇頁）を掲示してみかん作の空間的拡大の状況を述べている。勿論土地利用図だけでは不十分であるから空中写真を利用することは結構であるが、地形図利用が全然無価値というのではないと思う。はじめから価値のないことが判っているならば、手間をかけてこの四枚の土地利用図は作成せぬ方がよいだろう。評者はこれに未練を感じずる者で、土地利用の推移の概要を知る上では大切であろうと思う。著者が空中写真を重視されるならば、藤枝市西方（二三頁）・引佐郡三ヶ日町（四七頁）・静岡市用宗地

区（七一頁）に見られるような樹令構成図がこの稲取地区の場合にも欲しいものである。

第一章では藤枝市西方のみかん栽培を取り上げて、その地域的展開過程を地域住民の生活実態と関連させて論述している。そのためまず西方を含む旧葉梨村の地域性のみかん栽培地域であることを導き出しているが、その手順として、静岡県のみかん栽培地域の三区分↓その一つ中部栽培地域（庵原・静岡周辺・志太地区）↓志太地区（岡部町城内・藤枝市域内）↓藤枝市域内↓葉梨地区↓西方と位置付けを行っている。つづいて西方地区におけるみかん栽培の拡大を考察するために空中写真を判読して老朽園・壮年園・未成園の樹令構成図を用いたことは注目に値する。しかし西方地区樹令構成図（二三頁）は西方地区の園地拡大を考える場合だけに使用することに限定しておけば有効であるが、このままでは他地区のそれと比較することは決してすべきでないと考える。というのは、そういういった空中写真の判読は第二章の引佐郡三ヶ日町のみかん栽培の場合にも利用（図2-1-1、四七頁）され、しかも「これを図1-3（二三頁）において示した藤枝市西方の事例と比較してみると引佐郡下は未成園の率が高く、老朽園の存在も西方に比べ少ないことがわかる」（四六頁）とあるが、外見的に両図を比較すると、むしろ記述の逆の如く看取される。これは図的表現に共通性を欠いたためであって、すなわち両図において老朽園と未成園との記号の黒白が全く逆になっていることから招来されたものである。図の統一を切望する次第である。

次にみかん作の地域的展開の実態では階層別農家のみかん栽培へ

って第一章以降において静岡県下のみかん産地を例として、みかん作の地域的展開要因の形成が地域の近代化の中でどのような形で形成せしめられるかということに重点を置いて考察を進めているのである。

しかしながら、俗に「言うは易く、行なうは難し」という言葉があるように、序章中の地域論では華かな論義が練りひろげられ、従来の地理学徒が好んで使用する手法の一つを否定して、地域的展開の表現は、「単に土地空間的にみかん栽培地を新旧の地図などを比較し、その消長を述べることもこれに当たらない」（八頁）と論断している。そう論じながら、具体的に稲取地区みかん作の空間的拡大の一節では土地利用図上に現われた実態の項目を設け、五万分の一地形図「稲取」の（一）明治一九年測図、同二九年第一回修正、（二）明治一九年測図、昭和二年第二回修正及び同一九部分修正、（三）明治一九年測図、昭和二年第二回修正測図、同二七年応急修正、（四）明治一九年測量、昭和四六年編集によって作成された明治初・中期、昭和初期、昭和二〇年代、昭和四六年頃の四枚の土地利用概要図（一一九～一二〇頁）を掲示してみかん作の空間的拡大の状況を述べている。勿論土地利用図だけでは不十分であるから空中写真を利用することは結構であるが、地形図利用が全然無価値ということはないと思う。はじめから価値のないことが判っているならば、手間をかけてこの四枚の土地利用図は作成せぬ方がよいだろう。評者はこれに未練を感じる者で、土地利用の推移の概要を知る上では大切であろうと思う。著者が空中写真を重視されるならば、藤枝市西方（二三頁）・引佐郡三ヶ日町（四七頁）・静岡市用宗地

区（七一頁）に見られるような樹令構成図がこの稲取地区の場合にも欲しいものである。

第一章では藤枝市西方のみかん栽培を取り上げて、その地域的展開過程を地域住民の生活実態と関連させて論述している。そのため、まず西方を含む旧葉梨村の地域性のみかん栽培地域であることを導き出しているが、その手順として、静岡県のみかん栽培地域の三区分↓その一つ中部栽培地域（庵原・静岡周辺・志太地区）↓志太地区（岡部町域内・藤枝市域内）↓藤枝市域内↓葉梨地区↓西方と位置付けを行っている。つづいて西方地区におけるみかん栽培の拡大を考察するために空中写真を判読して老朽園・壮年園・未成園の樹令構成図を用いたことは注目に値する。しかし西方地区樹令構成図（二三頁）は西方地区の園地拡大を考える場合だけに使用することに限定しておけば有効であるが、このままでは他地区のそれと比較することは決してすべきでないと考える。というのは、そういう空中写真の判読は第二章の引佐郡三ヶ日町のみかん栽培の場合にも利用（図2-1、四七頁）され、しかも「これを図1-3（二三頁）において示した藤枝市西方の事例と比較してみると引佐郡下は未成園の率が高く、老朽園の存在も西方に比べ少ないことがわかる」（四六頁）とあるが、外見的に両図を比較すると、むしろ記述の逆の如く看取される。これは図的表現に共通性を欠いたためであって、すなわち両図において老朽園と未成園との記号の黒白が全く逆になっていることから招来されたものである。図の統一を切望する次第である。

次にみかん作の地域的展開の実態では階層別農家のみかん栽培へ

の参加状況表によって、みかん栽培が、年を経るごとに下層農にも生産を営めるように変化する様相を検討し、さらに地域的展開要因の考察の中では、明治一二年の勤業調査表、明治末期の物産表などの史料を用いて明治以降農業生産の推移を述べながら換金作物として地域住民がみかん作を選択した経緯に触れている点は歴史地理学にとって寄与する点が大きい。

第二章は静岡県西部のみかん栽培の核心地引佐郡三ヶ日町を例に、その地域でのみかん栽培依存率の高まりを老朽園と関連させ、主として労働力の面から要因を追求したもので、まずこの地域の地域性から説き起こしている。劈頭に「三ヶ日町（旧西浜名村・東浜名町の合併によって成立した」とあるが、評者は合併前の東浜名が町制を施していたことを知らない。沿革的にいえば、明治二二年町村制の施行によって、三ヶ日・鶴代等旧一五か村を合わせて西浜名村となり、また都筑村は東浜名村と改め、西浜名村の方は合併前町制を施して三ヶ日町となったが、東浜名村の方は合併時まで村制をつづけていたのである。そして昭和三〇年町村合併促進法に基づいて三ヶ日町（旧西浜名村）と東浜名村が合併、新しい三ヶ日町が誕生したのである。だから「旧西浜名村・東浜名町の合併」は「三ヶ日町（旧西浜名村）・東浜名村の合併によって成立した」と改むべきである。しかし、これは何ら本文の内容を疵つるものではない。その内容として当地域の特質は、未成園率が高く、老朽園の存在が少なくない。また近年の急速な圃地拡大等が指摘され、この特質の生ずる背景として必然的な条件とそれは労働力の投下と関連すると考え、みかん園化と専業兼業別農業人口の動向を取り上げ、つづいて農業

生産依存の立場から明治期の除虫菊・桑・糸綿、大正・昭和初期の鵜草・いちびへの変遷及び農業外労働対象の存在とし量表生産、内職の形態の織物工業について検討し、また土地所有および経営形態の考察を行ない、最後に労働投下量からみかん栽培と他作について説述し、引佐郡下のみかん作は、近代化された農村内部で自己の生活を営み続けなければならぬ地域住民の新たな生活維持手段として労働が投下され、地域的に展開がなされてきたものである、と結んでいる。

第三章は静岡市用宗地区のみかん栽培の展開要因に関する考察であるが、この地区については、すでに昭和四六年町誌編集委員会の手に成る「用宗町誌」が発行され、著者はその編集専門委員の有力な一人として参加され、第一部の用宗地区とその自然素描を単独で執筆し、第七部明治期の社会経済的変貌、第九部明治後期の人文的背景、第十部大正期の殖産と地域変貌の三部は細井淳志郎氏と共同でまとめられている。このように著者はこの地区を最もよく理解しているのであるから、この章は著者の体験からにじみ出たエキスのように感じられる。これに反して永い歳月静岡市内に住みながら、市街地周辺に立地する用宗地区は市域唯一の水産業地である点に地域性があり、みかん作としての地域性はこの地区と背中合わせになっている小坂地区にあるとし、用宗地区のみかん栽培については全く問題として取り上げなかった、いわば無関心の評者が論評しても、それは的是なずれになることは必然だから、この章に限り論評は遠慮したい。ただ付言しておきたいことは、著者がこの章のはじめに、「使用資料の多くは用宗区有文書であり、これは用宗町誌に用いた

ものと重複するものである」といっている。その用宗町誌を丹念に長時間を費やして読んだところ、総ページ数三四四頁の大形判の町誌であるが、まとまってみかん作を記載した部分は一箇所もなく、漸くみかんや柑橘の文字が出現するのは、第一部第二章用宗地区の土地条件の中で、沿岸に数列走る砂丘の後背凹地が「かつては桃畑・桑畑などに利用されており、現在では蜜柑畑などにも利用されてあり」と、玄武岩からなる山は微酸性の壤土に覆われ「窒素等の養分を多く含むため柑橘には適している」の二箇所だけである。

町誌本文におけるみかん作の取扱いは上述の如くであるが、付録として添付された一二〇分の一用宗全図を見ると、可成り広い地域に亘って果樹園が広がっている。こう見てくると用宗地区のみかん作は、それを以て地域性とするほどに成長してはいない。むしろみかん作を以て地域性を鮮明にしている小坂地区の隣接地刺激によって用宗地区の住民がみかん栽培に動き出したもので、小坂みかんの地域的拡大の周辺現象のように思われる。著者は本書第三章において静岡市用宗地区の明治期からの生産活動を展望しつつみかん栽培が戦後から発達しはじめた要因を論じているので、評者は以上のよりな所見を述べた次第である。

第四・五の両章では、みかん作の地域的展開に強いかかわりあいをもち報徳運動を取り上げ、第四章では庵原地区における報徳社の役割、第五章では稲取地区における報徳運動との関連性を克明に検討している。第四章では、まず明治二〇年庵原村柑橘樹令別作付面積表（村史近代篇所載）を利用して庵原村下のみかん畑拡大の様相を概略的に把握することから始まり、みかん作中核地の検出と主力階

層が中層農に起因する点など興味深いものがある。さらにこの地区のみかん作が、一握りの上層農（地主的性格をもつ）だけでなく中層農まで浸透して行く要因として報徳社・産業組合の組織の役割について、報徳社とみかん作の地域的関連性、報徳社―産業組合・みかん作の関連性、みかん作の拡大―報徳社―経済体制との係わりあい、と節を追って考察を進めている。庵原地区は静岡県下では古くからみかん栽培の行なわれた地域であり、また現在みかん作の集中地域でもあり、典型的経営の行なわれている所である。県下のみかん栽培上心臓部ともいえるこの地域だけに空中写真による樹令構成図が揭示されていないのは頗る遺憾である。折角他地域のそれは揃っているので、それらと比較して庵原地区のみかん作の地域的拡大の様相の特色を知りたいからである。

第五章は、「みかん作の地域的展開と報徳運動との関連性」となっているが、そのサブタイトルにあるように、「旧稲取村における老農田村又吉の先覚者としての意義」となっていることから、この章では稲取地区の問題を取り上げたものである。その書評執筆の最中に伊豆大島近海地震（昭和五年一月一日）が起り、稲取地区には東西に走る断層が生じ、山崩れなどによって大被害を受けた。みかん作地域における突発事件である。この地震から一週間後の新聞紙は「出荷出来ない伊豆みかん、庭先で腐り始める」と報道している。この地域では収穫はすでに終わり、みかんは貯蔵庫に収められていたが、地震で貯蔵庫が壊われ、傷ついたみかんから腐敗が進んで来た。またプラスチック製のボックスに仮貯蔵したまま農家の庭先に野積みになっているみかんも傷み出している。地震によって

交通路が寸断され、みかんの輸送が途絶えたためである。平常の年ならば今が出荷の最盛期で、関東方面、一部は東北へとみかんトラックは走り続けるのである。みかん作の地域的展開の一要因としての輸送路の重要性が地震被災をうけて痛感された。被災後の稲取みかんの回復のためには、原点に帰って先覚者田村又吉の仕方や報徳運動を回顧したいものである。その時この第五章の内容は十分応答してくれるであろう。その内容については、一部は既述したので、書評の制限枚数に近づいている関係上、ここでは省略しておきたい。

以上の各章は静岡県下のみかん栽培地域についての攻究であったが、第六章は全国的視野に立って農基法農政下でのみかん栽培地域の大幅な拡大の様相について概観している。その中で、みかん圃地率と水田率とを比較（一六四頁）とし水田率全国平均値を下回っている所のみかん圃地面積の多い県であるのが特徴的であるといふが、みかん作の北限を越えた東北日本の水田率まで加わっている全国平均値と比較することは妥当でないように思われる。また図6-13-1の昭和四三年みかん未成圃率図には石川・滋賀・鳥取・山梨の諸県が白地となり、東北日本の各県と同様の取扱いをうけているが、第6-4図の昭和四四年みかん圃地率図では上記の四県がいずれも圃地率一%未満の地域に組み込まれている。わずか一か年間にバラバラ離れたこれら諸県が一斉にみかん圃地が出現、拡大するものだろうか。作図上のミスか、資料不完全のまま作成した図でないならば、そういった諸県の地域住民の生活行動こそ興味ある問題となるものである。

第六章の「農基法農政の展開とみかん作の動向」の内容では、そ

の第三節の「作物の選択的拡大の実態」に多くのページが与えられていることから察すると、戦後の選択的拡大農政時期に焦点をあわせて論究しているようにも思われる。しかしわが国戦後のみかん植栽は、周知のように、ある時は選択的拡大農政の、ある時は複合経営推進農政の目玉であった。したがって複合経営推進の観点に立つてみかん作地域の実態を調査すると、本章記述と異なったものになるのではなからうか。社会体制とのかかわりあいでも地域性を闡明することのむづかしさが痛いほどわかるのである。

本書は、本質的には経済地理学的観点に立って著述されたものであるが、全章を通じて、みかん作の展開以前の産業構造の推移をも論及している点で歴史地理学的視点が貫かれている。また歴史学では各歴史時代の人物が雲の湧くように次から次へと出てくるが、歴史地理学ではその影さえ現われぬという現状の中で、本書が取扱った片平信平ら報徳運動の主力メンバーが庵原地区のみかん作に尽力した状況や稲取地区における先覚者田村又吉の業績などの検討の方法は、将来の歴史地理学の発展の上に大きな参考になるものと思ふのである。

要するに、近ごろ出色の地理書といっても過言ではない。

A五判、一九八頁、多賀出版発行 昭和五二年六月、二〇〇〇円

(佐々木清治)